

立命館大学が三菱地所と連携し、キャンパスでロボットの活用実験を始めた。仲谷善雄学長は「わくわくするキャンパス」の創造が大学の人材育成に欠かせないという。

知を創るキャンパス



仲谷 善雄

立命館大学学長

知能・IoT(あらゆるものがネットにつながる)が進化していく時代に、本当に大切なものを見分ける感性、それらをメッセージや行動の形で社会に投げかける創造力と構想力、そしてそれらを協力的に実現できるコミュニケーション力と行動力が求められる。

予想や予測という言葉が立ち向かえないほどの変化が、世界中で起きています。このような時代には混沌とした状況の中から価値を見出し、あるいは新たな価値を創造することにより、社会にインパクトを与えることのできる「超創人材」とも呼べる人材が求められる。

超創人材はAI(人工)が、教員を軽々と超え、世界に大きく羽ばたく上で、大学の役割は何か。それは、学生に内在する知的好奇心や能力を最大限に引き出すことだ。そのためには、学生が問題意識や好奇心を持つ「きっかけ」を提供し、各自の問題意識を高め、発展させることができるプログラムや教職員、施設、

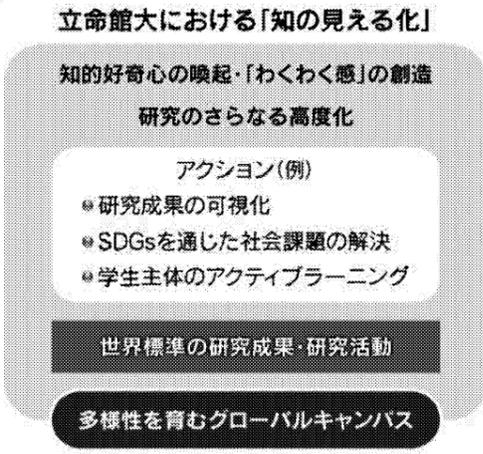
学生に「わくわく」提供

組織などの「環境」を整えることである。

立命館は昨年夏、2030年代を見通した学園ビジョン「R2030」を策定した。現在、その具体化を進めており、きっかけ作りと環境のさらなる整備に取り組んでいる。

その一環として、今年4月、2つの「チャレンジアクション」プロジェクトを立ち上げた。1つは、世界に共通する課題の解決に日常的な視点で取り組む立命館版SDG「見る」ように努力して

「見る」ように努力して取り組む立命館版SDG「見る」ように努力して



多様なロボと共生■研究成果「見せる」

いた、すなわち自らの好奇心に基づいて主体的に問題を探究し、学生から教員や研究者に働きかけてきたのである。

しかし、研究分野が拡大、細分化され、学生が独力で自らの関心にマッチした研究を探することは非常に難しくなった。また、ダイバーシティの進展は知的好奇心の多様化でもある。大学が従来「わくわく」を生み出す展開が求められている。

そこでは、キャンパスを建物が見える「もの」ではなく、知的創造に関わる「こと」として見ることが決定的に重要である。

具体策の第一歩として今年3月、立命館は三菱地所と人とロボットとの協働に向けた実証実験や情報発信などを目的とした協定を締結し、立命館大学のキャンパスでのロボット導入の社会実証実験を開始した。

当面は、びわこ・くさつ(滋賀県草津市)と大阪いばらき(大阪府茨木市)の両キャンパスで運搬ロボットや清掃ロボットなどを稼働させ、次世代の施設運用管理モデルの構築を目指す。今後、それらをケーススタディとして、教育・研究につなげたい。

最先端の商業用ロボットや研究段階のロボットなど、多くのロボットがキャンパスで動いている。訪れた人は、ロボットと共生する近未来的な情景を目の当たりにし、最先端の研究水準を実感することになる。

ポイント

リアルな学び場 重要性色あせず

大学の授業の形態や学生の学び方は大きく変わる可能性がある。だが、ICTがどんなに発達しても、多様な背景を持つ人たちが同じキャンパスに集い、お互いに刺激を与え合いながら知的成長を遂げる場という大学の役割は色あせしない。

大規模公開オンライン講座(MOOC)に代表されるように、情報通信技術(ICT)の発達でキャンパスの教育的機能をいかに高めていくか、これからの大学の課題になるだろう。(横)

二次利用不可